

地方創生の拠点として期待される「道の駅」②

～鳥取県「にちなん日野川の郷」の取り組み～

木村 俊文

要旨

地方創生の観点から「道の駅」に対する期待が高まっている。本稿では、地方創生に向けて先駆的な取り組みを行っている道の駅として、鳥取県の「にちなん日野川の郷」を紹介する。中山間地域の町の中心部に道の駅を核としたコンパクトビレッジを形成し、住民の利便性向上と地域全体の活性化を図ることを目指している。

道の駅では、地元産の農林産物の加工・販売のほか、それらに関連した各種イベント開催、レストラン運営、さらに今後は高齢者向けサービスも展開しようとしており、6次産業化の推進を考える上で示唆に富んでいる。

はじめに

道路利用者の休憩施設として始まった「道の駅」が、最近では「まち」の特産物や観光資源を生かして「ひと」を呼び込み、地域に「しごと」を生み出す中核的な存在となる可能性が高いことから、「地方創生」の拠点とするべく推進する動きがみられる。

国土交通省は、国の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」が発表された2014年度から各省庁と連携して、地方創生の拠

点となるような優れた取り組みをしている「道の駅」を選定し、重点的に支援する「重点『道の駅』制度」を実施している。

現在のところ、この制度に基づく選定数は、①特に優れた機能を継続的に発揮している「全国モデル『道の駅』」が6ヶ所、②今後の重点支援で効果的な取り組みが期待できる「重点『道の駅』」が73ヶ所、③企画の具現化に向けて今後の取り組みが期待される「重点『道の駅』候補」が49ヶ所と、3タイプ合計しても128ヶ

所と道の駅全体（登録総数1,093ヶ所）の1割強とまだ少ない。

しかし、今後も設置者である市町村からの応募を受け国の重点支援

図表1 重点「道の駅」制度の概要

	①全国モデル「道の駅」	②重点「道の駅」	③重点「道の駅」候補
選定者	国土交通大臣	国土交通大臣	地方整備局長等
要件	設置から一定年数（10年以上）	既存設置（企画段階も可）	企画段階
選定ポイント	地域活性化の拠点として、特に優れた機能を継続的に発揮していると認められるもの	地域活性化の拠点となる優れた企画があり、今後の重点支援で効果的な取り組みが期待できるもの	地域活性化の拠点となる企画の具体化に向け、地域での意欲的な取り組みが期待できるもの
支援内容	全国的なモデルとして成果を広く周知するとともに、さらなる機能発揮を重点支援	取組を広く周知するとともに、取組の実現に向けて、関係機関が連携し、重点支援	関係機関が連携し、企画検討等を支援
選定数		6	73
	14年度	6	35
	15年度	-	38
		49	49
		-	-

（資料）国土交通省「道の駅」関連サイトより作成

図表 1 日南町の位置



(資料)日南町役場HPより

を受けることができる道の駅が増えると想定されることから、地方創生の拠点としての役割が徐々に強まっていくものとみられる。

そこで、地方創生に向けて先駆的な取り組みをしている道の駅的具体例を紹介することとしたい。

今回は、中山間地域でコンパクトビレッジを目指して取り組んでいる鳥取県の「にちなん日野川の郷」(以下「日野川の郷」と称す)を紹介する。

日南町の概要

日南町は、中国山地のほぼ中央、鳥取県南西の内陸部に位置し、北西は島根県、南西は広島県、南東は岡山県と3県に接する県境の町である。町の面積341平方キロの9割を山林が占め、古くから林業が盛んな町である。

直近の人口は5,031人(日南町役場公式サイト、16年1月末)と1950年(16,045人)をピークに減り続ける一方で、高齢化率は46.8%(2010年国勢調査)と県内で最も高い。

将来推計人口では2040年に人口が3,216人と現在よりも約4割減少する見通し(日南町まち・ひと・しごと創生総合戦略・人口ビジョン、15年8月)であ

り、将来的にも地域の活力が低下することが懸念されている。

町の総合戦略によれば、「今後町全体を均一的に発展させることは地理的条件、財政・人口規模の面から困難」であるため、「施策の選択と集中を図ることが重要」とした上で、「将来的に必要な機能や人材を再構築し、コンパクトで効率的なまちづくり(コンパクトビレッジ構想)に取り組んでいく」としている。

基本コンセプトと提供する機能

こうした将来構想に基づき、その拠点となる道の駅「日野川の郷」が2016年4月22日にオープンした。鳥取県では15番目、中国地方では100番目の道の駅にあたる。鳥取県内では冒頭で紹介した国の重点「道の駅」制度に3ヶ所が選定されているが、「日野川の郷」はこのうちの一つである。

日南町の中心部には、従来から総合病院や健康福祉センター等をはじめとする「医療・福祉ゾーン」と、役場・美術館・図書館等の「行政ゾーン」のほか、JR生山駅、いくつかの商業施設などがあり、コンパクトビレッジを検討する素地があった。

それらの中間地点に新たに道の駅を整

写真1 「にちなん日野川の郷」外観



写真2 隣接する子育て支援やデイサービス施設



備することにより、道の駅を中心とした半径1キロ圏内に、商業、医療・福祉、行政機関など、住民の暮らしを支えるコンパクトで効率的な機能を集約させることが可能となり、さらにこれら施設を町営バス（電気自動車1台）が1時間に1回ずつ巡回することによって利便性の高いコンパクトビレッジを形成するというものである。

すでに山間に分散する周辺集落と町の中心部との間は、町営のデマンドバス（予約型の運行形態）などにより結ばれている。つまり、住民が町の中心部に移り住むようなものではなく、自宅から町の中心部に通ってくるようなコンパクトビレッジを目指している。

敷地は、隣接するホームセンター「コメリ」やコンビニエンスストア「ローソン」も含め、もともと町有地だった場所である。消防署派

出所やJAの出荷施設（予冷倉庫）、町の子育て支援センターやデイサービス施設、製材加工施設なども隣接している。

こうした場所に、道路管理者である鳥取県が駐車場・トイレ・道路情報提供施設を整備し、日南町が農林産物直売所、レストラン、多目的ホールなどの地域振興施設を整備した。

「日野川の郷」が提供する機能は、道路利用者向けの休憩・道路情報案内といった道の駅本来の機能に加え、地域の観光総合案内、特産品を活用した地域振興、地域福祉の向上、防災機能などである。

さらに、町では将来的に道の駅に隣接する形でサービス付き高齢者住宅や定住促進住宅を整備する計画であり、多世代交流や地域福祉の向上を図るほか、運営面では施設・設備の相互利用など効率的な運営が期待されている。

図表2 道の駅「にちなん日野川の郷」の概要

所在地	鳥取県日野郡日南町生山386
開設	2016年4月22日
交通	米子自動車道江府ICより国道181号経由で約30分。主要地方道新見日南線沿い。JR生山駅からは徒歩約20分。
総事業費	630百万円（鳥取県：150百万円、日南町：480百万円）
敷地面積	9,221㎡
駐車場	小型車79台、大型車2台、身障者用2台、二輪車用10台
情報提供施設	情報提供用モニターや掲示板などを通じて、道路・気象・地域情報（観光・イベント等）を提供
地域振興施設	農林産物直売所、農産物加工所、レストラン、多目的ホール等
その他の施設	イベント広場、太陽光発電設備、木質バイオマスエネ活用設備、EV充電器、授乳室、公衆電話、無線LAN
管理・運営	株式会社M・Aサービス（本社：米子市、仕出し料理・宅配弁当・高齢者食など食事サービス業）が町の指定管理者として管理運営。
運営スタッフ数	若年から高齢までの男女、障がい者（5名）を含め計20名。
周辺の名所	ヒメホテル・ゲンジホテル（7月初旬）
名産	にちなんの米、にちなんのトマト

（資料）パンフレットやウェブサイト等から作成

写真3 隣接する製材施設や倉庫



管理運営の体制

管理運営は、日南町と運営委託管理契約を締結した(株)M・Aサービスが行っている。同社は弁当や総菜の製造販売を主業務とし、日南町内でも高齢者向けなどに毎日100件ほど弁当を配達しているが、同県内の日野町では指定管理者として長くレストラン・宿泊施設の運営に携わってきた実績を持つ企業でもある。

「日野川の郷」の運営には、障がい者(5名)を含む若年から高齢までの男女、総勢20名が勤務している。駅長として全体を取り仕切る渡邊史朗氏(57)は、大阪などで豊富な経験を積んだ洋食の調理師であり、自らの強みを生かして出身地である当町の活性化に取り組んでいる。

地元産木材の利用と環境保全

町では林業・木材産業の振興促進のため、「日野川の郷」の建設の際、建物の木造部分には町内産スギ・ヒノキのLVL(単板積層材)を使用した。適切な森林管理が行われていることを認証する国際機関FSC(Forest Stewardship Council、森林管理協議会)の認証を受けた木材で建てられ、道の駅としては国内で初めてのFSC認証施設となった。

また、町では「日野川の郷」で扱う商品・サービスの売上から一品につき1円をレシートに明記して徴収し、町内の森林保全(下刈や間伐など)に充てることで「二酸化炭素排出ゼロ」の道の駅を目指している。館内掲示やパンフレットなどで環境保全に取り組む道の駅であることを説明しているが、現在のところ、購入者からは何らクレーム等はない。

直売所の特徴と6次産業化の展開

「日野川の郷」の農林産物直売所には、季節ごとの新鮮な地場野菜のほか、手作りドレッシングやジャム、特産品であるトマトを使ったカレー等の加工品、町内産の酒米を使った日本酒、「林業の町」ならではの木工品などが並んでいる。

これまで町内には、不定期に開催される青空市などを除き、地元の農産物を扱う店舗が少なかったため、地場野菜を入手したいという地元住民の要望に応えるためにも直売所を整備した。

なお、直売所の運営に関して当地のJA鳥取西部は直接には関与していないが、「野菜のプロ」と呼ぶにふさわしいJAの定年退職者がスタッフの一人となっており、直売所へ出荷する生産者をあらゆる面から指導している。本格的に直売所に

写真4 環境保全のための基金



写真5 地場野菜が並ぶ直売所



出荷する JA 組合員は当町から 40 kmほど離れた米子方面にある JA 直営の大規模直売所「ふれあい村アスパル」へ出荷しているが、そうした人であっても「日野川の郷」の運営には協力的な人が多く、「道の駅向け」と「アスパル向け」とに分けて対応している。

また、直売所には付帯施設として加工実習室が設けられており、店頭に並べられた 18 種類の手作りドレッシングも専門家の指導を受けながら各出品者がここで作ったものである。

実際の購入客の反応としては、新鮮な地場野菜が好評であり、しかもドレッシングと一緒に購入する機会が多いことから、手作りドレッシングの売れ行きが好調で品薄状態になっているという。

とりわけ注目されるのは、直売所では、ほかで売っていない（ここでしか買えない）ものが売れるという特徴がある点である。たとえば木工品では、地元大工の手作りによる子供向け「木製おもちゃのキッチン」が高価にもかかわらず即売と異例の人気となっている。また、「おにぎり」もコンビニなどに並んでいるような綺麗にパッケージされたものではなく、地元産米を手で握った、見た目も「やばったい」ものの方がよく売れるという。

一方、農産物加工場には、テナントと

して日南トマト加工株式会社（地元トマト農家 6 名が出資して 06 年に設立した農業生産法人）が入居している。当地は冷涼な気候と清澄な水に恵まれた地域であることから糖度の高い良質なトマトが採れ、代表的な農産物となっている。同社はここで完熟トマトを使って、ジュース、ソフトクリーム、ケチャップなどを加工・販売している。

また、レストランでは、固定メニューは設けず、直売所に出荷された野菜など地元でとれた旬の食材を使った料理をカフェテリア方式で提供している。

当面の課題と今後の見通し

「日野川の郷」では、年間目標の来場者数を 30 万人、直売所やレストランなど全体の売上高を 1 億 7,000 万円と設定している。新聞や地元テレビなどマスコミの取材が多かったことが奏効し、県外客を中心にオープン後の 1 週間で 1 万人、その後の 2 週間で 1.5 万人と、予想以上に順調な滑り出しとなった。今後は地元客のリピート利用が増えると思込まれている。

しかし、冬季は 40~50 センチの積雪量となり、交通量も減ることから、冬場の売上減少を夏秋にどれだけカバーできるかがポイントだという。

写真6 直売所に付帯する加工実習室



写真7 寄木ブローチなどの木工品



夏秋の売上拡大を目指して、店頭では特産品であるトマトを前面に出すと同時にトマト関連商品の充実を図るほか、「日野川の郷」の独自ブランド商品（日本酒、ブレンドコーヒー、日南高原米コシヒカリなど）の販売促進を強化する考えである。

また、冬季には来店促進策を兼ねて、多目的ルームや加工実習室を使ったイベントを多く開催する計画である。定期的に保健所の衛生検査を受けている加工実習室をフル活用して、対象別に料理教室を開催するほか、現行加工品のレベルアップを図るとともに新たに惣菜や菓子類の開発も進めたいとしている。

さらに、直売所で販売している木製ブローチなどの寄木細工品が目玉商品となっているが、関心を示す客が多いことから地元の寄木大工による体験イベントも時期を見計らって開催する予定とのことである。

一方で、直売所への出荷者数は現状140名であり、これを300名まで増やすことも当面の課題となっている。出荷者数の増大により年間を通じて多品種の地場野菜や加工品、手工芸品などを充実させ、農家所得の向上にも繋げたいとしている。

前述したとおり、管理運営会社である（株）M・A サービスは、町内で車両によ

る食事宅配業務を毎日午前に行っていることから、同社の宅配サービス網を活用して出荷者を募集するのとあわせて、直売所まで出向けない農家から野菜を集荷することを検討している。加えて、買い物代行や一人暮らし高齢者の見守りなどの実施も検討する考えである。すでに同社は同県内の大山町で食事宅配業務を兼ねて、買い物支援、見守りサービスを行っている実績がある。

まとめ

以上のとおり、「日野川の郷」は農林産物の加工・販売をはじめ、レストラン運営、各種イベントの開催、さらには今後予定される高齢者向けサービスに至るまで、まさに地方創生に向けて6次産業化を推進する実践的な取り組みといえるだろう。

道の駅を訪れる人は、そこでしか入手できないようなモノやサービスに価値を見出す傾向があるように思われる。そのためには、新しいアイデアや独自の視点で企画を進め、自ら加工・販売を行い、イベント開催やサービス提供も手掛ける。そんな姿勢が重要だということを「日野川の郷」の取り組みは示唆しているように思われる。

人口減少が不可避な中で、コンパクトビレッジとして住民生活に必要なサービス機能が維持・向上するとともに、道の駅が地域内外を結ぶ玄関口となって町全体の活力を創出する拠点となるよう、「日野川の郷」の今後の展開に期待したい。